

口語詩句の理想とは何だろうとずっと考え続けていますが、まだ分かりません。短いゆえに工夫され伝統的に進化してきた季語や切れ字や調べなどどう向き合うのか。それらは作品の表面的には使われていなくても無意識に書く者の「身体」を縛ります。

口語詩句とはそれらの縛りの制約から自由になり、言うべきことをストレートに伝えることができる短詩とでも言いましょうか。そのためには、身体を意識の指示から自由にするという作業が必要になってくるような気がします。身体から率直に出てくる言葉を探してみました。

金魚から見える景色は

形而上のように

きっと、

世界の裏側にある

作者 まちりこ 埼玉県

——金魚玉の中から金魚が見る世界は大きく湾曲した世界の裏側かも知れない。そして彼らが見る人間たちが醜くないと誰が言えるだろう。

貝になった母さんを横目に

カナヅチの私は

海の底でじっとしている

作者 猫谷圭希 広島県

——母さんは無言の貝になったのに、泳げないつまり文字通りカナヅチの私は横たわるしかない。閉鎖された海底で。

妹の眉毛をととのえてやり知る秋

作者 藤色 京都府

——整えられた眉の細い曲線。それが「妹」という近くてしかも不思議な分身のものだから、秋の気配はすぐそばだ。

母さんは帰ってこない

林檎には林檎の理由があるはず

なのに

作者 まちりこ 埼玉県

——林檎には林檎の理由、母さんには母さんの理由がある。それは誰も犯すことができない神聖なものだ。

ビー玉の為にラムネの瓶を割る

仕方なかった仕方なかった

作者 猫谷圭希 広島県

——百の徒労の末に一の結果。いや大きく傷つくこともある。私たちはしばしばそういうことをする。そして仕方なかったという。本当に必要なものが分からなくなったこの世界。

はねる髪を

とかして、ゆわく。

法律も

こういうことが

したいのでしょうか？

作者 翠 東京都

——生き物としての髪をたわめ、反発する力をなだめて様々なかたちに成形する。法律という外と身体という内の戦い。

肺呼吸だからいけないのか

きみは水族館でわたしを見ない

作者 白野 新潟県

——深海の青い光に囲まれてきみは魚族に変身していく。生存の根拠が違えばもう取返しがつかないのだろうか。

短歌では生きていけない僕たちだ

穂村弘は月面に住め！

作者 松下 誠一 東京都

——穂村弘だから成立する世界がある。引力は十分の一だ。

百合の花開くためかかるちからは

吸いつく夢をはがすちからで

作者 藤ほたる 神奈川県

——花が開くとは浸透圧で押し広げられる力による。いったんそうなればどんな力も止められない。夢よりも先に生きる身体がある。

錆びている傘で相合い傘なんて、

虹に一回喰われてこいよ

作者 折田 日々希 神奈川県

——虹に喰われるという秀逸な表現。愛も結局身体ごと喰うか喰われるかだろう。

水になるまでの愉悦に桃がある

作者 細村 星一郎 東京都

——桃がしたたる水になるまで。あるいは水の身体内部が桃なのか。

去勢して座って

おしっこする犬は

なぜかすみっこ

狙ってはずして

作者 加藤 美紀 愛知県

——動物も人間も身体が精神を支配するのは同じだろう。観察眼の鋭さ。

前腕に天体のせて身体ごと

銀河になってトゥシューズ履く

作者 うずたろう 埼玉県

——この詩のような恰好を実際にしてみると、物を載せた前腕と後ろに伸ばした足がバランスを取っているのが分かる。宇宙も同じことをしているのかも。

父親が

高野豆腐を

日没のように食べてて

雨に似る箸

作者 折田 日々希 神奈川県

——「父親」というものは日没である。広重の雨のように突き刺さる箸。一枚の絵。

がんばれ他者

がんばれ他者のみなさんが

後生みたいに抱えてるもの

作者 青木雅 埼玉県

——他者に頑張れと言えるものだろうか。頑張れというからにはちゃんとした価値観があるのか。無責任な面白さは SNS そのもの。

対称に描かれて林檎の憂鬱

作者 合川秋穂 京都府

——林檎が言っている。「私のこと何にも分かっていないんでしょう。左右が全く対称なんてあり得ない！」